

ルール解説

ルールの理解は勝利への一歩だ！

試合運営委員会から選手の皆さんへ

第四回テーマ 「このパート、なにをするの？」 質疑編

遠い昔、私たちも皆さんと同じ現役プレイヤーでした。敗れて涙したあの日の記憶は、今も胸に鮮明に刻まれています。卒業して審判・スタッフをやりながら、あの時これが理解できていれば…と思う事は少なくありません。そんな私たちだからこそ、今の選手に知って欲しい事があります。そんなテクニクや、理解されていないかも？と思えるルールについての解説を、試合運営委員会より連載としてお届けします。

さて第四回は、質疑でどういうことをしてほしいか解説します。「質疑って、何をしたいかわからない」と困ったことはありませんか？「質疑で反駁しないでください」と言われたことはないでしょうか？今回は、質疑にどのような役割があるのを見ていきましょう。

◆「それだとこんな問題が発生しませんか？」

質疑で、時々このような質問をする人がいます。あるいは、「この点については、○○という資料があるのですが、どう思いますか？」などなど。しかし、このような質問をどれだけやったとしても、審判としては判定に反映できません。なぜなら、質疑と応答の役割は、ルールで次のように定められているからです。

ルール本則第2条2項
質疑では立論の内容などについて質問を行い、質疑での応答は立論の補足として扱われます。

つまり、質疑によって得られる応答は、あくまで立論の補足にすぎず、立論の内容をよりわかりやすく、あるいは詳しく、正確に言い換えたものなのです。よって、新たな見解を議論するような質問を、審判として評価することはできません。

◆「つてことは、質疑は試合に影響しない？」

「つて」思った人もいるでしょう。質疑応答では新しい論点が出せないから、勝利には結びつかない、と。

しかし、そうではありません。質疑にも、勝敗にかかわる重要な役割があるのです。それは、相手の立論について、両チームと審判の三者の理解を一致させることで、反駁の議論をしやすくすることです。

基本的な使い方を説明します。例えば、相手の立論がよくわからないとします。わからないまま反駁しても、有効な反駁はできませんし、ズレた反駁はいくらやっても、ズレていますと一蹴されるだけです。それに、立論がわかりにくい時は、審判もわからずに困っていることが多いのです。その時、「つていうことで、よくね？」と、わかりやすく説明する質疑や応答ができれば、審判が自分たちと全然違う採り方で判断していた、というリスクを避けることができます。

更に、もっと戦略的な使い方も可能です。例えば、立論で挙げられた二点の発生過程が、独立したものはなく因果関係がある場合です。質疑で各発生過程の内容を確認し、「つまり発生過程1があつて、それが

原因で発生過程2が起きて、メリットが生じるんですね？」と聞いておけば、反駁も一つで済み、因果関係の有無についてその後もめることもありません。

このように質疑は、自分たちと相手、そして審判で、同じように議論を理解しているかを確認する重要なパートです。選手のみならず審判の判定に疑問や不満を持つ時、その多くが、審判と選手間で議論の解釈が異なることが原因です。質疑と応答を利用して自分たちの考えや戦略を見せることで、審判の試合への理解をより深めることが出来ます。

最後に質疑におけるポイントを二つ述べておきます。一つは、連携です。質疑で聞いた内容は、反駁で活かしてこそ価値があります。そのためには質疑と反駁で打ち合わせをして、どう攻めるのか、そのためには何を聞けばいいのかを考えておきましょう。

もう一つは前を向くこと。先述の通り質疑は両チームと審判の理解を共通させるものですから、質疑者と応答者の会話で終わってはいけません。相手に質問するだけではなく、審判へのアピールも兼ねているという意識をもって話してほしいと思います。

質疑も他のパート同様うまく使えば勝利に貢献します。そんな質疑を大いに活用してほしいと思います。

次回予告

質疑について、おわかりいただけただけでしょうか？次回、同じくやるべきことがわかりにくい第二反駁について解説します。